

レーザー学会会長 霜田 光一*

Koichi SHIMODA*

国際会議に出ていつも感じるのは、日本人の質問が非常に少ないことである。私自身、質問したいと思っても、いつどのように質問してよいか迷っているうちに、質問の機会を逸してしまう。私たちは外国語が苦手だからというのも確かに一理あるが、どうもそれが主因ではないようだ。

本学会の年次大会の講演発表や『レーザー研究』の掲載論文に対しても、決して質疑応答が多いとはいえない。国内の他学会でも大同小異と思われる。中には上手な方もおられるが、私たちの大部分は質疑応答や討論が上手でない。そう思っているから、質問できない。質問しないから、いつまでたっても質疑応答が上達しない。

日本語の質問に対して日本語で答えているときも、大抵は発表者と同じような研究をしている人が実験装置の一部のパラメータを問い合わせたり、計算の細部を尋ねたりしている。それはそれで良いとしても、別の分野の人が“ばかな質問”といわれそうな初歩的、根源的な質問をしたり、意外な視点を指摘することは希である。たまに本質的な良い質問があっても、講演者は簡潔適切に答えられないで、質問の趣旨とは違う方面の話をして時間を潰したりしているのは残念である。

話が変わるが、1995年11月に制定された科学技術基本法の第2条において、「研究者及び技術者の創造性が十分に発揮されることを旨として」と記して、科学技術の振興には何よりも、研究者・技術者の独創性・創造性が第一であることが指摘されている。天才の創造性はその生まれつきの資質が第一であることが強調されている。天才の創造性はその生まれつきの資質によるかも知れないが、いかなる才能も、それを引き出す環境がなければ姿を現わさない。仙人の様な暮らしをしていてはどんなに独創的才能のある天才でも、レーザーや超伝導を発明発見することはできない。先天的才能である創造力を育成し、創造的研究能力を発揮するには、それに相応しい教育と生活環境が必要である。

教育というと、まず学校教育である。学校教育も大切であるが、教育は学校に限られない。ことに科学者・技術者には、学校を出てからの教育が必要で、それには学会の果たすべき役割が極めて重要である。レーザースクールや研究会の開催はその一助になるだろうが、旧態依然の学校のように教え教えられるだけでは、創造力を訓練し独創性を発揮するには不十分である。

もっとも効果的なのは、研究会、年次大会、シンポジウムなどの講演に対して行われる質疑応答ではないだろうか。講演者も質問者も傍聴者もそれによって得るところ、教育されるところが少なくないのである。

講演者にとっては、自分の研究の特徴や欠陥が明らかになるだけでなく、質問によって啓発されて新しい研究展開の道が見出されたり、考察が拡充されたりする。そして何よりも、質疑応答によって研究に対する刺激と激励を享受する。質問者もそのとき、思考力、構想力を磨き、講演者の研究の一部分に参加した興奮を感じる。傍聴者もまた、そのような質疑応答によって研究の意図や計画や進め方の核心に接することができる。

研究者・技術者の創造性を培い、練磨し、そして独創性を十分に発揮するのに、質疑応答を盛んにすることほど、すぐに実行できて効果抜群なことは無いであろう。独創的アイデアが質疑応答の中から、あるいはそれにヒントを得て生まれてくることが少なくないに違いない。

* 〒180 東京都武蔵野市吉祥寺南町 1-19-15

* 1-19-15 Kichijoji-Minamicho, Musashino Tokyo 180